

様式1

平成28年度 学校評価表

学校教育目標		「伸びる 素直で 元気な 向東っ子」													
a ミッション	夢と志を抱き、グローバル社会を生き抜く向東っ子の育成 「信頼され信頼に応える向東小学校教育の創造」				a ビジョン	○「知・徳・体」のバランスの取れた児童を育てる学校 ○「コミュニティ・スクール」としての使命感溢れる学校「地域は学校のために 学校は地域のために」				尾道市立向東小学校					
評価計画					自己評価					学校関係者評価			改善計画		
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月		h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案	
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ			
知	○家庭・地域と協働し児童の学力を伸ばします。	基礎・基本の確実な定着	教務部	・レディネステスト、形成的評価を生かした教え直しサイクルの実施	学期末テストにおける児童の通過率 60%以上 30%未満	85% 0%	91% 2%			・1学期末テストにおける60%以上の通過率は目標値を達成しており、特に算数科の達成率が高い。形成的評価を活用した教え直しサイクルや少人数指導の効果が現れてきている。一方で、30%未満の通過率が達成できなかった。特に、第2学年及び第3学年において、達成できていない児童の割合が多い。学力調査結果において、B問題の通過率が低い傾向であり、課題である。授業内容をB問題に対応できるようにシフトする必要がある。また、個の分析を行い、個の実態に応じた指導を、担任外の配置も行うなど計画的に実施していく。	5			・B問題（活用問題）は読解力の向上に非常に有効である。B問題が向上することにより論理的に物事を考え、順序立てて説明ができるようになることと考える。低学年の時からしっかりと対応して欲しい。 ・算数科の習熟度別学習は有効である。また教師の関わりがゆとりがなくなり、自己肯定感を高めることにも繋がると思われる。 ・形成的評価を生かした教え直しのサイクルは、基礎基本の学力を定着させるためには大切である。	・第2学年、第3学年の児童については、2学期以降、複数教員の関わりの中で、個別の指導ができるよう指導機会を設ける。 ・単元末には、活用を意図した課題解決の機会を設ける。そのことを受けて、単元末テストに教師が自作の「活用問題」を作成して実施する。
	○文化の発信基地となり地域の発展に寄与します。	学力の土台（学習習慣）の確立とコンピテンシーの育成を図る授業づくりの推進	研究部	・対話と課題発見・課題解決のある授業の創造 ・適切な課題の量と質の充実及び確実な点検	・キーコンピテンシー測定尺度による児童の肯定的評価の上昇（5%上昇） ・毎日の課題を提出する児童の割合	100% 90%	※（初回） 55.7% 95%			・対話と課題発見・課題解決のある授業の創造については、研究初年度に加え1学期は研究の方向性そのものを理解する段階であったため、目指す授業を効果的に開発する段階にまでいたっていなかった。夏季研修及び公開研究会指導案検討、全体授業研などを通して、指導者の実践力を向上していく。 ・家庭学習に対する取組については概ね成果を挙げている。特定の児童及びその家庭に課題があるため、家庭と連携してより一層の成果を挙げたい。	5			・聞く、伝える、理解することがお互いに正しくできないと対話にはならない。このことを子どもたちに気づかせることが大切である。社会生活の中で正しい対話ができることは重要なことであり、子どもたちの対話能力向上を前に願う。 ・常に自己葛藤を行い、真徳を確かめる姿勢は大切であり、今後の研究を楽しみにしている。	・葛藤場面を作ることは、児童の主体的な学びを導くためには重要である。そのための単元設定の在り方、発問の在り方、学習形態の在り方について、授業研究を通して理解を深める。 ・パイロット校の実践等、先進的な実践を収集し、実践レベルでの理解を深める。
	○家庭・地域と協働し児童の豊かな心を育みます。	学校支援ボランティアと連携した地域教育プログラムの確立と発信	研究部	・学校支援ボランティアと連携した教育活動の実施 ・学校運営協議会、地域教育支援推進委員会への出席	・地域の方から学び、地域の良さを感じることができた児童の割合	80%	97%			・学校支援ボランティアと連携した地域教育プログラムの確立と発信については、否定的な回答をした児童がほぼいないこと、そして、それぞれの学年で学級通信、HPなどで発信するなど、短期経営目標に沿った成果を上げることができてきた。現在向東小学校の総合的な学習の時間の改訂を行っている。学校支援ボランティアとの有機的なリンクを図ることで、教育効果を高める。	5			・現在、総合的な学習の時間を中核に、「課題発見・解決学習」として成立するようカリキュラムの再編成を実施している。この過程で、より効果的な支援を頂けるよう学校支援ボランティアとの新たな連携を図る（自他は12月末） ・学校行事のカリキュラム・マネジメントを実施し、学校支援ボランティアの方々に支援して頂く機会を再整理する。 ・学校運営協議会に出席する教職員は、今後の学校運営に関して、委員と協議できるように自ら課題を感じている点を提起できるよう準備をしておく。	
徳	○家庭・地域と協働し児童の豊かな心を育みます。	社会や集団の一員としての自覚を高め、他者や社会に貢献する意識をもつ児童の育成	生徒指導部	・友達のため、学校のために自分から考えた行動ができるよう指導する。 ・時間を守った行動や学校外でも自分から挨拶ができるよう指導する。	・人のために役立つことができる児童の割合 ・挨拶が学校外でも自分からできる児童の割合	80% 80%	83% 86%			・「みんなが気持ちよく過ごすため」という、目的意識を児童に伝えることにより、はきものをそろえる行動が少しずつ定着してきている。これは、時間を守った行動を心がけているため、あわせて、はきものもそろえることができているのではないかと推察する。しかし、目の届かない場所が乱れているため、担当が積極的に見回る、児童会と連携するなどの方策を今後も徹底する。	5			・人の役に立つことの喜びを実感させるには、褒めることが重要である。 ・「目の届かない場所が乱れている」背景には、「やらされ感」がどこかにある。「先生から見ると今はできる、学校の中ではできる、でも、他ではできない。」のはなぜかを考えて対話しないと本当の取組はできない。 ・教師の率先垂範の姿勢が重要である。 ・社会の形成者としての自覚を高めるため、何でもあつたが当たり前という考えを打破しなければならぬ。	・掃除については、2学期から縦割り班を導入する。6年生をリーダーとして育て、異学年での人間関係を醸成しながら、学校美化を推進する風土を確立する。 ・「役立つ感」を感じさせるためには、教師の意図的な仕組みが必要であり、一人一役、責任をもって、他者のために働く機会を設けるよう学級活動を見直しさせる。
	○家庭・地域と協働し自立できる児童を育成します。	目標に向かって努力し、自己肯定感をもつことができる児童の育成	生徒指導部	・児童会が示した月間目標を達成するよう目的意識を高める指導を行う。	・児童会の月間目標を達成できた児童の割合	80%	91%			・立ち止まってあいさつをすることを意識して行動することができるようになってきた。 ・時間を守った行動を意識させ、取り組ませた結果、児童の自己評価は大きく向上してきた。	5			・児童会のリーダーが「やらされ感」で動くのではなく、「自ら」考え、動くシステムを構築してもらいたい。 ・目標達成のアクションプランを考え、実行することが重要である。 ・児童自身が目標を立案することが必要である。	・児童会が自律的な運営を行えるよう、児童会役員の事前指導を行う。また、生徒指導部と連携し、代表委員会において、目標設定及び振り返りを行うシステムを習慣化する。
体	○家庭・地域と協働し自立できる児童を育成します。	体力・運動能力の育成	保健体育部	・体力、運動能力を向上させる取組の充実	・50m走で該当学年の全国平均を上回った児童の割合	+5% -12%				・新体力テストの50m走では、走り方のポイントを教えたり、自分の目標を意識させたりすることを試みた。授業中の走る機会を多く取り入れる。目標を持たせて、達成させる意識を児童に強く持たせる必要がある。 ・2学期からは、フィットネスの時間で体力を向上させる取組を行ったり、体育の時間の導入で「向東っ子体操」を取り入れたりとすることで、児童の体力の向上を目指していく。	5			・目標を持たせることはどの科目に対しても重要である。さらに子どもたち自身が成長していることがわかるようグラフにする（見える化）ことでモチベーションが上がると思う。 ・体力低下については地道な取組をしていくしかない。 ・児童自身が目標を立てることが重要である。 ・尾道市内の他校との比較の中で、本校の課題を改めて把握することが必要である。 ・他者との競争意識を高める。また、より良い連携のフォームを知る機会を作ることも大切である。	・一人一人の児童に、現在の自分の状況を知らせ、自分なりの目標を設定させることを重視して、取組を推進させる。 ・専門家を招聘して、走ることに関する指導を受ける。 ・1単位時間の運動量を十分確保できるよう体育の授業内容を見直すよう指導する。
	○家庭・地域と協働し自立できる児童を育成します。	食育・健康教育の充実	保健体育部	・自律できる土台としての生活習慣の確立を目指したアプローチ実践を行う。 ・郷土の特色を生かした食育の推進	・自律起床の増加率 ・虫歯治療応答率 ・郷土の料理、地場産物に対する認知度 ・主食、主菜、副菜の整った朝食の摂取率	+5% 60% 60% 50%	- 33% 20% 30%			・7月に生活実態調査を実施した結果、登校しているものの、約半数近くの児童は体調不良感（睡眠不足感）を感じている。また、統計的分析の結果、生活習慣のうち「就寝時刻」「起床時刻」「自律起床」は、睡眠不足感と強い相関があることが分かった。この分析データをもとに、自律できる土台としての生活習慣の確立を目指し、9月に生活チェック点検活動を実施する予定である。 ・まだ目標の半数近くしか家庭からの返信通知が届いていない。1学期の通知表渡しの個別懇談会で、むし歯のある児童への保護者へは、個別に治療のお勧めをした。また、共通認識のもと、むし歯罹患率の低下に向けて組織的に取組が進められるように、夏期休業中の教職員研修で、母校の実態を周知した。 ・1年生では、地場産物を5種類以上知っている児童が20%ほど、郷土料理については、5種類を知っている児童は、5%くらいとなっている。学年が上がるにつれて認知度は上がっているが、地場産物を活用した郷土料理を食べることが健康につながることを指導していきたい。 ・朝食については、毎日バランスよく食べている児童は、低学年になるほど少なくなっている。校内研修で、朝ごはんをバランスよく食べることの大切さについて学習した。このことをもとに、主食・主菜・副菜をそろえた朝ごはんを食べることの定着に向けた指導を全教職員で行っていき	5			・児童の生活習慣の確立については、PTA、保護者の関わりが重要である。保護者対象の講座を計画することも検討して欲しい。 ・個々の家庭の生活リズムによって睡眠不足の原因が作られている。調査実態の連絡と家庭への協力を繰り返すことが大切である。 ・地場産物、郷土料理の件については継続して取り組んでもらいたい。 ・食育の中で、自分が口にする野菜がどこから来ているのかを知ることも大切である。	・1学期の生活実態調査を踏まえて、2学期の児童自身のチェック活動を展開させる。その振り返りを通して、改めて自らの生活習慣の確立を図れるよう、学級担任、養護教諭が指導を行う。また、保護者啓発を保健便り等を活用して行い、家庭の協力を促す。 ・ランチルームにおける縦割り班給食を実施し、栄養教諭が直接指導を行う機会を設定する。その中で、地場産物、郷土料理についての内容も併せて指導する。
信	○教職員が日々成長するよう行動します	マネジメントや学校貢献を意識した業務推進	教務部	・前年度の課題を明確にし、改善事項を明記した企画書を作成する。 ・自分なりの学校貢献を意識した活動を定期的に行う。	・企画書の作成状況 ・学校貢献を意識した活動ができた職員の割合	80% 90%	93% 90%			・昨年度の課題を整理し、改善していくという視点で各分掌を見直していることと意識が高まってきている。特に、保体部の企画書は、マネジメントを強く意識した内容となっており、他の機軸とさせる。 ・花の手入れや草抜き、トイレのスリッパをそろえを行うなど環境整備をすることができた。また、ジュニアコーラスや太鼓指導、市連のバーレーンなどに自主的に活動した。	5			・企画書を作成することで終わりではなく、実績を伴った成果だと考える。 ・教職員が地域のお祭りに参加している地域もある。今後検討してはどうか。 ・先生方の日頃の行動そのものが子どものお手本である。 ・教職員が無難ないように調整を図ることも大切である。	・企画書のモデルを提示し、PDCAサイクルに基づく企画立案を遂行できるようにする。 ・一人一人が学校改善に参画している意識を持ってよう、業績評価に基づく面談を充実させる。

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
B：80≦（ほぼ達成）<100
C：60≦（もう少し）<80
D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。

※学校関係評価者3名に任意提出された学校運営協議会委員2名の評価を総括した。